

31 たかやなぎ
高柳

(新潟県柏崎市)

注目ポイント！

「高柳らしさを活かすこと」を合い言葉に若者達が始めた地域おこし。
宝ものの地域資源に磨きをかけ、都市との交流に活かす。



年間観光入込客数が約3万人(H元)から約24万人(H17)に！
人口の100倍を超える交流人口を生み出すことに成功！



交流観光中核施設「じょんのび村」

“じょんのび”とは、ゆったり、
のんびりすることで心の芯か
ら心地よくなるの意味の方言

コラム

観光カリスマの春日俊雄氏が
地域づくり構想の策定機会を活
用し、外部者の視点を取り入れ
つつ町民を交えた200回以上の
話し合いを主導して「自分たちが
まちづくりの主演」との意識づく
りを促したことにより、宿・温泉・交
流館などにつ
いて町民自ら
の手で運営す
る意気込みが
生まれ、町民
主体の地域づ
くりが実現。



観光カリスマ
柏崎市 観光交流課長
春日 俊雄氏

これまでの経緯

- | | |
|-------------|--|
| 昭和50年代後半 | 過疎化と共に昔ながらの茅葺き屋根が次々と姿を消す中、「高柳町らしさ」が失われることに危機感を持った30歳代の若者たちが町おこしに立ち上がる。 |
| 昭和59年(1984) | 埼玉県狭山市の朝市に出店する。 |
| 昭和60年(1985) | 廃屋寸前の茅葺き屋を町民有志で修復し、交流拠点「おけや」をオープンする。 |
| 昭和63年(1988) | 町の活性化を検討する「ふるさと開発協議会」を設置する。
協議会では町民40名からなる委員と8名の助言者(専門家)の協力により、町のこれからの地域づくりに取り組むため、検討会、懇談会、現地調査、先進地視察など延べ200回を超える活動を行い、「じょんのびの里づくり構想」を策定する。 |
| 平成 元年(1989) | 町に伝わる民話をもとに新しい夜祭り「狐の夜祭り」が始まる。(毎年10月開催) |
| 平成 4年(1992) | 株式会社じょんのび村協会(第三セクター)を設立する。 |
| 平成 6年(1994) | 温泉、ふるさとレストラン、手づくり工房等を備えた宿泊施設「じょんのび村」がオープンする。 |
| 平成 7年(1995) | 交流観光コア施設「新潟県立児童館こども自然王国」がオープン。 |
| 平成12年(2000) | 「第7回優秀観光地づくり賞 金賞・自治大臣賞」((社)日本観光協会)を受賞する。 |
| 平成17年(2005) | 柏崎市と合併し、柏崎市高柳町となる。 |

主な取り組み

じよんのびの里づくり構想

昭和60年、人口減少率が17%に達し新潟県内ワースト1位に。急激な過疎化と高齢化で地域存続の危機感が表面化し、町民有志が「高柳町ふるさと開発協議会」に集い、手探りの活動と、2年間で200回を超える議論の中で「農村滞在型交流観光構想(じよんのびの里づくり構想)」を策定。

特徴のない豪雪・農山村ながら、都市農村交流という視点で新しい形態の観光産業創出に成功し、人口の100倍を超える交流人口を生み出した。

経済活性化を目的とするコア施設として、宿泊施設、温泉、観光物産直売施設等を備えた複合交流施設「じよんのび村」と、自然体験施設「こども自然王国」を隣接して整備するとともに、集落の活性化を主眼とするサテライト施設として、荻ノ島地区と門出地区に農家民宿「かやぶきの宿」を整備し、都市農村交流に大きく寄与。



こども自然王国



農家民宿「荻ノ島かやぶきの宿」

「和紙づくり」と「かやぶきの宿」

大正時代には40戸程が冬場の副業で紙を漉いていた門出地区で最後の紙すき家の小林康生氏が門出和紙の再生と共に仲間達と取り組んだ地域おこし活動が和紙という地産物を使った観光交流の先駆けに。

現在、農家民宿「かやぶきの宿」では、地元農家のお母さん達が交替して食事当番を行う等、集落全体で農家民宿を支えている。



門出和紙の紙すき体験

狐の夜祭り

町民の自主的活動が源流の「ふるさと開発協議会」の活動から、古くからの民話をもとに地元若者が創作した祭が生まれ、都市住民も参加できる仕組みづくり等により、今では地域おこし活動の中核に。また秋の収穫祭、雪祭りなど都市住民が参加できるイベントを展開し都市農村交流に大きく寄与。



狐の夜祭り

問い合わせ先

柏崎市観光交流課

Tel : 0257 - 21 - 2334 <http://www.city.kashiwazaki.niigata.jp/>

(株)じよんのび村協会

Tel : 0257 - 41 - 2222 <http://www.kisnet.or.jp/jon-nobi/>